

# 野外スポーツコース大学生の環境意識構造について

内藤 成悟 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 中野 友博

キーワード：環境意識、環境教育、野外スポーツコース大学生

## 1. 序論

1975年に出されたベオグラード憲章では「環境教育の目的は、個人と社会集団が、総合的な環境とそれに関わる問題について関心と感受性を持ち、人類の重要な立場と役割を理解し、環境の保護改善に参加する意欲と問題解決のための技能及び評価能力を身につけ、また適切な行動を起こすために、環境問題に関する責任と事態の危急性についての認識を深めることができるようにすることである」としている。環境省(2004)は「環境教育は、環境や環境問題に関心・知識をもち、人間活動と環境とのかかわりについて、総合的な理解と認識の上にならって、環境の保全に配慮した望ましい働き掛けのできる技能や思考力、判断力を身につけ、よりよい環境の創造活動に主体的に参加し環境への責任ある行動がとれる態度が育成される」としていることから、環境教育は環境意識に大きな影響を与えていると考えられる。

川村(1999)は、環境意識構造について中学生の段階では3因子で構成されていたが、高校生の段階になると分化し、4因子から構成されていることを明らかにしている。しかし、環境意識の高さについては、高校生の環境意識は高いとはいえないことが明らかとなっている。びわこ成蹊スポーツ大学野外スポーツコースでは、環境教育に着目した講義などもあり、学生の環境意識は高い基準ではないかと思われる。

そこで本研究では、野外スポーツコース大学生の環境意識構造について明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

【調査対象】びわこ成蹊スポーツ大学野外スポーツコースに所属する大学生40名を被験者とした。内訳は3年生26名4年生14名である。

【調査方法】平成25年11月18日～11月25日の期間に川村(1999)が作成した環境意識構造調査用紙を使用し、アンケート調査を実施した。

## 3. 結果と考察

調査対象者40人のデータについて因子分析、主因子法、バリマックス回転を行ったところ、野外スポーツコース大学生の環境意識構造は4つの因子で成り立っていることがわかった。第1因子を「エコ意識」、第2因子を「環境問題解決についての意識」、第3因子を「日常での環境配慮」、第4因子を「省エネ・省資源活動に対する関心」とそれぞれ解釈した。

表1：環境意識構造についての因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3	因子4
「エコ意識」				
リサイクルに力をつけている。	0.81	0.00	0.07	0.01
現在、環境問題の解決のための活動を行っている。	0.68	-0.13	-0.18	-0.13
古紙回収に参加している。	0.60	0.01	0.37	0.17
ゴミの減量化に力をつけている。	0.60	0.00	-0.04	0.17
将来的に、地球環境問題の解決につながるような活動をしたい。	0.58	-0.09	0.08	0.29
ゴミの分別収集を実行している。	0.48	0.29	0.03	-0.39
廃品を扱うときには、環境問題に配慮した商品を扱うようにしている。	0.44	-0.49	0.43	0.09
自給率のよさを賞賛している。	0.41	0.21	0.05	-0.02
「環境問題解決についての意識」				
学校では、環境問題について学ぶ授業があった方がいいと思う。	0.10	0.62	0.20	0.07
環境問題は、今の人類の意識のままで解決できない。	-0.19	0.58	-0.03	0.19
環境問題はゆるめるべきだと思う。	0.10	0.33	0.19	0.14
アクリルがエントンをかきやがせたりすることはいけないと思う。	0.21	0.53	0.28	-0.02
自然保護こそが、環境問題の解決にとって大切である。	0.24	0.52	0.28	0.13
小生の保護野ではダイオキシンに注意しなければならぬ。	0.07	0.47	-0.07	0.11
環境問題に関しては、自分で実行するまでがなかなか大変である。	-0.14	0.40	-0.28	0.34
「日常での環境配慮」				
環境問題の解決には、一人一人の意識改革が必要である。	-0.07	0.16	0.63	-0.10
再生紙を使うようにしている。	0.50	0.07	0.60	0.14
冷暖房では、温度設定に気をつけている。	-0.02	-0.07	0.56	0.20
農作物を作る経験は環境問題の解決につながると思う。	-0.13	-0.17	0.55	0.16
たばこは環境破壊者だと思う。	0.16	0.02	0.50	-0.02
ポイ捨てはしない。	-0.01	0.07	0.49	-0.04
生ごみはたいして利用するようになっている。	0.34	-0.52	0.48	-0.14
「省エネ・省資源活動に対する関心」				
環境問題についての記事やニュースは注目している。	0.39	0.24	0.02	0.69
環境問題の解決に、社会の団力が役立つと思う。	-0.03	0.57	-0.07	0.63
外道の環境対策について知らない。	0.04	0.01	-0.03	0.61
電気器具の三電法は切実なようにしている。	0.10	-0.40	0.25	0.46
食べ物は、余分に作らず、残さないようにしている。	-0.07	0.28	0.16	0.48

学年ごとの各因子の合計得点の比較をt検定を用いておこなったところ、有意差はみられなかった。合計得点の平均については、エコ意識因子はともに低く、環境問題についての解決因子と日常での環境配慮因子はともに高く、省エネ・省資源活動への関心因子では3年生のみが高いという結果になった。

表2：因子ごとの平均得点とt検定の結果

因子	3年生(n=26) 平均 SD	4年生(n=14) 平均 SD	t値
エコ意識	2.95 (1.15)	2.75 (1.28)	1.395 n.s.
環境問題解決についての意識	3.80 (1.03)	3.71 (1.18)	0.619 n.s.
日常での環境配慮	3.45 (1.29)	3.37 (1.31)	0.475 n.s.
省エネ・省資源活動への関心	3.26 (1.23)	3.04 (1.29)	1.162 n.s.

## 4. まとめ

本研究で野外スポーツコース大学生の、環境意識構造は4因子から構成されていることが明らかとなった。学年ごとの比較では有意差はみられなかったが環境意識について、省エネ・省資源活動への関心因子は3年生が高いことが明らかとなった。

<引用、参考文献>

- 1) 環境省(2004)：環境保全の意欲の増進及び環境教育の推進に関する基本的な方針
- 2) 川村康文(1999)：環境意識構造について—高校生の場合— 京都教育大学環境教育研究年報第7号 49-55